



寒燈  
夜話

小粟外傳

三編  
二

~13  
3919  
14



13  
3919  
14

寒燈夜話 小栗外傳卷之十二



二十編

東都

絳山戲編

山鬼の魔術女児を騙し  
老僧の念珠怪獸を走せ

且説高沢の常阿上人と小栗夫婦を熊野山お赴りしめまよりの小栗が所業  
の東國より又び居る輩お助重の光景を告ぐやと武蔵ある二芳村の  
里知らちとちて下総の方にて候と往り結城の里お至りたる此辺お  
小栗が所業を又びより候受け暫く此地お逗留し人々の行状  
搜索す此地方へ結城お朝の居城めて山川の便より珠は持朝の政  
正しければ民豊み振ひぬ爾より茲より一件の奇縁ありそをいふゆゑ  
國守ある持朝一人の女児とりて其名を白糸姫とて呼ひぬ今年十七

容貌比なしくいと形番なり。父母のいふとみおやとねむは才親友全の者  
 なるべし。娶とほじと深国がまひひく。人の中見入させたり。以て季秋  
 の下旬一夕風雨晦冥中にてと騷しかりしが忽ち白糸姫の去向を知らず  
 形りぬ村胡夫婦もどつれ嘆き。人と四方を分ちて捜索れどもさうも知ること  
 なく。あまりに索かひく。卜筮の博士を請く。卜ありとふは考へて云。この  
 人間のつらさるるも妖魔の所為也。此山より戌亥の方にてと姫人をまじ  
 す。とてめ。しるま。命恙はしとらひども。廿日も過る。是れ朱は速く捜索  
 め。と。進。せ。悔。とも甲斐なし。と。や。と。お。胡。これ。と。父。て。易。う。な。る。ゆ。ゆ  
 あり。我。若。も。一。城。の。主。と。して。鎌。倉。殿。の。外。藩。と。今。妖。魔。の。為。お。女。見。入。  
 奈。る。と。其。武。威。拙。く。平。士。も。劣。り。斯。て。い。う。て。軍。を。持。つ。る。の。任。り。人。  
 昔。源。義。家。の。鳴。弦。を。と。と。不。怪。異。と。退。治。し。源。三。位。頼。政。の。闇。夜。と。越。え。別。て。  
 君。の。心。悩。を。易。し。と。車。ま。り。我。武。彼。友。お。及。ら。ぬ。も。此。困。よ。る。女。見。入。奈。る。と。  
 あり。お。め。く。と。徒。ふ。る。と。奈。何。なる。天。魔。あ。て。も。あ。れ。此。能。報。つ。あ。れ。る。と。と。  
 それ。より。士。卒。を。引。俱。一。城。より。乾。方。に。日。く。捜。索。と。も。それ。と。定。り。廿。五。日。に。  
 朝。より。夕。至。り。山谷。の。厭。なく。奔。走。と。る。む。り。あ。て。徒。お。日。次。過。し。ま。り。あ。く。お。  
 下。世。国。山。舟。山。と。い。ふ。隣。國。さ。が。ら。結。城。と。程。も。近。く。御。お。胡。の。願。ま。り。と。  
 此。地方。に。結。城。の。乾。か。當。り。し。く。村。胡。彼。友。を。尋。ね。と。健。中。の。なる。即。當。意。を。撰。  
 數十。人。を。將。く。彼。山。に。上。り。終。日。尋。ね。求。れ。と。白。糸。姫。の。去。向。を。知。る。こと。は。其。  
 日。も。既。お。暮。れ。と。し。金。烏。西。に。傾。け。夕。霧。山。隈。に。朦。朧。と。な。り。竜。と。は。ゆ。ゆ  
 對。ひ。の。峯。に。樓。閣。の。彷彿。と。して。と。ん。た。ね。の。持。朝。と。れ。を。望。み。て。いと。不。安。今日  
 終。日。此。山。を。行。く。し。は。れ。ども。一。軒。の。白。屋。が。も。か。れ。目。今。此。樓。閣。を。入。る。と。怪。し  
 る。れ。ぬ。ま。れ。往。て。え。む。と。谷。下。り。崖。を。攀。ぐ。樓。閣。の。在。り。至。れ。ぬ。心。を。

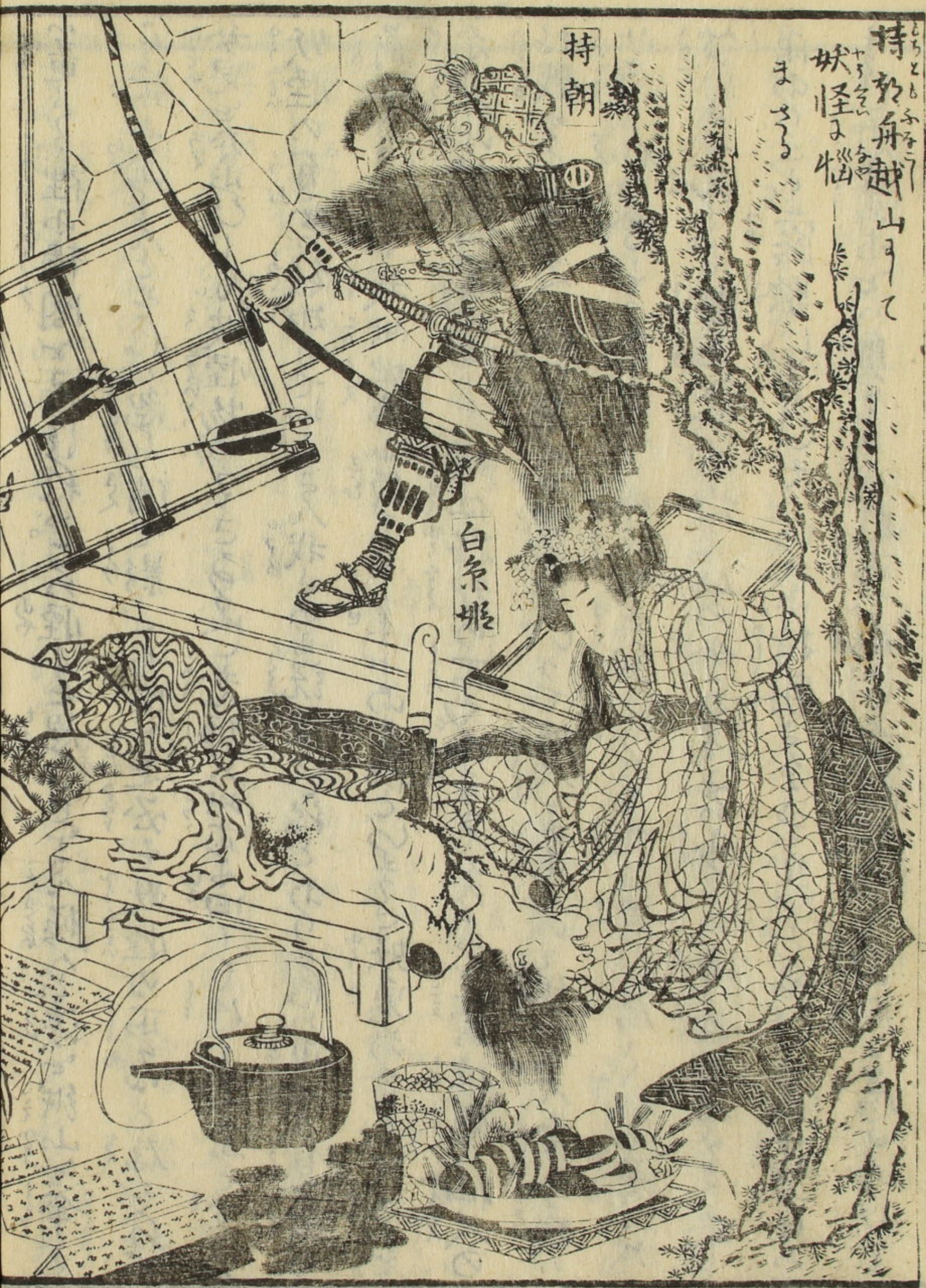
容貌比なしくいと形番なり。父母のいふとみおやとねむは才親友全の者  
 なるべし。娶とほじと深国がまひひく。人の中見入させたり。以て季秋  
 の下旬一夕風雨晦冥中にてと騷しかりしが忽ち白糸姫の去向を知らず  
 形りぬ村胡夫婦もどつれ嘆き。人と四方を分ちて捜索れどもさうも知ること  
 なく。あまりに索かひく。卜筮の博士を請く。卜ありとふは考へて云。この  
 人間のつらさるるも妖魔の所為也。此山より戌亥の方にてと姫人をまじ  
 す。とてめ。しるま。命恙はしとらひども。廿日も過る。是れ朱は速く捜索  
 め。と。進。せ。悔。とも甲斐なし。と。や。と。お。胡。これ。と。父。て。易。う。な。る。ゆ。ゆ  
 あり。我。若。も。一。城。の。主。と。して。鎌。倉。殿。の。外。藩。と。今。妖。魔。の。為。お。女。見。入。  
 奈。る。と。其。武。威。拙。く。平。士。も。劣。り。斯。て。い。う。て。軍。を。持。つ。る。の。任。り。人。  
 昔。源。義。家。の。鳴。弦。を。と。と。不。怪。異。と。退。治。し。源。三。位。頼。政。の。闇。夜。と。越。え。別。て。  
 君。の。心。悩。を。易。し。と。車。ま。り。我。武。彼。友。お。及。ら。ぬ。も。此。困。よ。る。女。見。入。奈。る。と。  
 あり。お。め。く。と。徒。ふ。る。と。奈。何。なる。天。魔。あ。て。も。あ。れ。此。能。報。つ。あ。れ。る。と。と。  
 それ。より。士。卒。を。引。俱。一。城。より。乾。方。に。日。く。捜。索。と。も。それ。と。定。り。廿。五。日。に。  
 朝。より。夕。至。り。山谷。の。厭。なく。奔。走。と。る。む。り。あ。て。徒。お。日。次。過。し。ま。り。あ。く。お。  
 下。世。国。山。舟。山。と。い。ふ。隣。國。さ。が。ら。結。城。と。程。も。近。く。御。お。胡。の。願。ま。り。と。  
 此。地方。に。結。城。の。乾。か。當。り。し。く。村。胡。彼。友。を。尋。ね。と。健。中。の。なる。即。當。意。を。撰。  
 數十。人。を。將。く。彼。山。に。上。り。終。日。尋。ね。求。れ。と。白。糸。姫。の。去。向。を。知。る。こと。は。其。  
 日。も。既。お。暮。れ。と。し。金。烏。西。に。傾。け。夕。霧。山。隈。に。朦。朧。と。な。り。竜。と。は。ゆ。ゆ  
 對。ひ。の。峯。に。樓。閣。の。彷彿。と。して。と。ん。た。ね。の。持。朝。と。れ。を。望。み。て。いと。不。安。今日  
 終。日。此。山。を。行。く。し。は。れ。ども。一。軒。の。白。屋。が。も。か。れ。目。今。此。樓。閣。を。入。る。と。怪。し  
 る。れ。ぬ。ま。れ。往。て。え。む。と。谷。下。り。崖。を。攀。ぐ。樓。閣。の。在。り。至。れ。ぬ。心。を。

消く痕も好し。その妖怪も斯うれぬと噴るといふも詮さへし。猶昨日の既ぬ  
 暮て士卒も疲勞なれば。斯て物の用も乏かじ。今夜の士卒は女をばし。  
 明且に至るべし。高人數を倍して此山中と特はくし。妖魔を獲て今日の退恨は  
 暗きと齋の方へ赴く。忽然として一人の僧も出遭する。かて持胡が馬前  
 進て頭首してやとせり。貧道は彼正なる谷間も居る。老僧は徒辱も  
 とのぬ。只今師の申してある。今日相とこの山中も特はくし。日暮るに怪り下  
 速に往く。庵より遠くを歩かせよと命は付す。此女も事のなき。持胡  
 不審ていふ。汝が師の何等の人もて我悩めるを。知く遠くは紙一はく。侍回意  
 ける。ふもあせむ。道の師が名を申陽とて。各軍に厭ひの心を世の  
 たふす。いと嫌。此山中の菴と常人間も交る。をせよ。只公道三昧も光陰は  
 送れり。爾らの心を自らを要して。草庵の裡に在る。ふ里の

外のことほでも知りぬ。相公の此山へ入る。昨夜既も知り。今もこの悩  
 めるを知る。かむりの浮屠氏もこれと。國守の恩をいふ。兼畧もなま  
 る。よりの多道も命とて遠くもあつ。露凝ひもて師が意を果さしめ  
 と。頼もはへる。お頼。悲しく。さて六塵世の俗も厭ひ。この山中も陰れ  
 け道。彼のいみじくも。爾のれ。俗も増す。我と款待。芳志はは  
 たり。あせり。空もあつ。おとせ。き。や。案内を。おとせ。前へ。せ。行。奉  
 二町も。あつ。忽ち一坐の大松の下もあつ。其例も柴門の。薜蘿は  
 纏り。れ。甚。閑。雅。も。木。奥。の。声。谷。神。も。響。音。も。寂。寥。も。休。ひ。一。傍  
 持胡を門外もあつ。おのれ。前も入り。程も。木魚の。声。も。庵。主。と。見  
 志。き。老。僧。の。身。も。真。際。の。法。衣。も。穿。ひ。も。水晶の。念。珠。も。摘。り。門。外  
 あり。貧。道。則。ち。菴。を。申。陽。も。て。此。山。中。に。住。こ。既。も。十。年。の

及び傾きの恩を直する事也。適相公今日此山中狩りありて宿せ  
 る方好く、さき怪ましくおぼしき人々と存じ、徒らして草庵に  
 ちりしもの。自ら迎へて、老翁の歩行自在ありて、さき  
 此無れを故し、多し此亦廿一夜を以て、明しあれと懸ふ、  
 徳ありげなるが忠告ふ、さき喜び老師の宜へばごとく、日暮不知  
 案内の山中殆ど及び、小芳志より今夜を易く明し、いと  
 遠がし、ありて申陽うら笑ひ、と這行くと前まで、一室に清く酒飯を  
 出し、主従を款待し、持朝これを謝し、其後菴主の對ひ、つゝ某今日此  
 山お狩りする鳥獸を獲入るるに、我一人の女兒のあし、此れと妖怪の  
 為に奪われ、その去向を知らず、此山中のありき、と朝より夕に至る  
 まで搜索せし、此の事か、さきもゆき空しく山をわらんと、さき夕霧を

籠るる裡に樓閣をえは、怪しと思ひ、さき極んと溪を紙山と奉る  
 こと、亦お至ると、さき忽ち消て影どもは、是必と妖怪の所と存せられ、  
 女兒と奪ひ、彼怪物のまさり、とて老師に此亦お回しく住ま、さき  
 妖怪の有る、熟知しておる、我れ、我れ、我れ、とあり、申陽眉を破り、  
 前ありて、我れ、我れ、我れ、とあり、我れ、我れ、我れ、とあり、  
 亦、亦、亦、とあり、亦、亦、亦、とあり、亦、亦、亦、とあり、  
 狂戯せ、とあり、狂戯せ、とあり、狂戯せ、とあり、  
 此庵に仙の舎、とあり、此庵に仙の舎、とあり、此庵に仙の舎、とあり、  
 笑し、め、め、め、とあり、笑し、め、め、め、とあり、笑し、め、め、め、とあり、  
 雨のり、とあり、雨のり、とあり、雨のり、とあり、  
 事、事、事、とあり、事、事、事、とあり、事、事、事、とあり、



持朝舟越山  
妖怪は悩  
まらる

初く平夜も更圍て二更中なほと思ひ外方お人のすまのけをひまされし  
 るる仙人やと持紙門の隙より窺へる徒才も燭を照して出立お先一挺の  
 雲をかた入る。雲の圍あ七八人の異貌女性陪従多り。中て雲の戸を開いて立  
 出のを入ふ此日以をそとて搜索る。我女兒の白糸なまはすあらくいふと  
 驚きまら立歩くとあらしう前へ庵まの戒められ浮動をわらむる尚こと  
 窺ふ怪しうお庵主の傍まの徒才もか容貌みる様のこしそ射菴ま  
 法衣を脱きて白糸が側ふゆゑあてや酒りて身よ今夜の良有はるお夫  
 さめてといふうりも籠子盃推し出る其跡より大ききある組板は裸躬る人  
 上へ昇りて出る。これとらふ小我所當小似たり。こまむびるおとせしは  
 香ての裸躬人の肉を切て肴に飽きてか飲食ひ酒ま十分なる射菴主白糸が  
 身をとらて云かうの我汝を獲く今日既ふ七日に及べり。其間多し小説はる

されど我公も憂せよ今夜の是非は枕席をとりあまら若固辭とあらはれ  
 りて組板の人とおるぞくせん且汝が父持朝をも我神通をりて此正母は秘  
 これをさ人命とらんごらふとらよ命を腫や否と追々將小姫戯人を  
 白糸双も取りてかの拂ひ涙をらとくと流しては奴家と世の作業悪く  
 あり。妖獸の爲も獲られ此地下も身もくも其を念ふありかたおいりて  
 汝と枕席を共よとらおや此身は甲斐うん女もまら汝も命をららん人らと  
 父の名もあつ下総の結城の津井主なる弓矢の道はいと賢くいつせも人  
 何条汝方りて傾けりとのん妖術をりて父上を此正も命をせし  
 奴家を欺く虚言をらんいふ心をそとせも妖魔のため身は汝はせんや  
 殺まらさく速も殺まらんと言智く罵りけり。庵主大に怒り我壽五百歳か  
 及ひ神通既も成る公の欲する知らるるといふと好し。今汝一女子が意よ

驚きさるるを奇怪し。さよのやみよ。今悲しむ憂目と見え。其後汝を殺さず。  
 と俄に九右衛門令。白糸が衣裳を脱し。前の俎板に郷もて強く焚き燃せしや  
 ると。持朝最前より。光景紙門の隙より窺ひ居り。事毎入らむ。忍び  
 ざれど。女兒が身。お過失あることを。怖怒り。おあきく。わづりしが。事既まじくお  
 至れば。今の堪う。秘斬り入ると。まよはれ。紙門堅く。固く。開く。ゆが。こは惜  
 と。刀が。枝を。切られ。只足。洗石。うんご。か。撃。こ。些も。破。ま。ごと。生。付。女。児  
 の。叫。ぶ。声。頻。よ。父。こ。ゆ。ま。び。心。を。焦。燥。を。角。と。る。紙。門。の。間。は。前。を。貫。く。と  
 なるの。隙。の。わ。が。こ。よ。り。起。き。弓。矢。を。とり。菴。主。を。秘。し。ひ。ま。う。と。射。る。菴。主。  
 此。射。酒。を。飲。で。居。り。し。が。目。今。前。の。花。ま。う。と。入。る。より。も。不。慮。を。り。く。を。矢。を  
 拂。ひ。持。朝。の。方。を。白。眼。く。嘲笑。く。し。り。を。た。れ。汝。武。義。を。誇。り。我。を。射。苗。入  
 と。さ。う。そ。お。し。ま。れ。その。膽。の。太。ち。なる。と。今。夜。の。下。物。を。せん。と。る。ふ。生。亦。訪。く

ると。罵。り。つ。這。裡。は。對。ひ。花。ま。う。を。持。朝。は。り。と。糺。矢。を。とり。は。じ。つ。め。結  
 矢。継。早。射。射。り。と。し。とも。或。ら。も。ま。り。ら。か。う。く。ま。う。は。は。に。く。蹴。落。し。な。う。じ  
 花。ま。う。の。より。尚。早。く。人。が。とり。て。敵。が。う。は。も。武。勇。の。父。へ。射。持。朝。を。射。も  
 為。さ。ま。う。る。射。は。矢。程。も。ま。ね。れ。は。ま。う。に。せん。と。声。を。揚。げ。士。卒。を。呼。ぶ。お  
 回。意。り。の。は。ら。お。お。ひ。嘆。息。し。嗚。呼。云。甲。斐。も。か。た。下。郎。う。ま。此。う。人。我  
 一人。此。妖。怪。を。仕。苗。入。と。自。ら。心。を。勵。す。つ。南。無。や。八。枝。大。菩薩。其。武。運。を。助。け  
 多。と。一。念。に。双。手。を。り。て。紙。門。を。押。す。お。神。刃。の。如。渡。あ。や。う。ま。人。洗。門。に  
 垣。瓦。紙。門。を。ま。ら。く。と。破。れ。と。例。に。し。う。あ。ま。焼。く。と。持。朝。も。太。刀。枝。か。じ。し  
 庵。主。と。目。の。只。一。太。刀。と。斬。り。く。ま。り。あり。の。糺。子。と。ま。向。へ。投。擲。する。と。又。も  
 か。じ。し。これ。を。避。き。と。糺。子。の。酒。け。を。殺。て。面。不。さ。ぬ。と。か。じ。し。が。その。奥。氣







悉く亡びて。此れ聴て死るる生く世々上人の鳩恩とて亡びて。下と  
 受へる。上人とれをばてと不審撫子と指眼を因く。夢付記念して居る  
 る。つ忽ち双眼死ひて。たこと白眼大喝一声とて曰汝畜生邪慾と擅  
 人を欺くこと何ぞ甚き足す。犯せぬ罪と悔志氣をあらためて。名  
 助け。佛神を乞ふ。せそ犯罪と者人よ。さるもあへん。今此所す。さ  
 我を欺れ。國守に仇せん。これ尚ほ罪と堪ふ。あふ。や。さ。其志氣を  
 改めよ。爾ら。我汝を。永劫奈落。沈ま。な。奈何去。畜生。あ。何  
 と責け。け。罵。頭。揚。嘲笑。以。膝。を。辱。腰。及。臆。めて。怒。め。我  
 逸樂とせん。が。何ぞ。を。改。めて。木。石。の。く。世。に。入。我。も。術。あり。故。に  
 さ。く。の。坊。も。思。ひ。知。り。し。や。ま。ん。と。立。揚。ら。ん。と。さ。る。処。を。持。つ。念。珠。を。り  
 上。く。畜。生。の。妖。術。除。陀。の。正。法。を。奈。何。と。と。と。拍。ひ。い。り。く。由。り。け。成

入道の才一縮となるうと思へ。猛ら。年経。猿猴と。変。一。声。を。叫。び。て  
 逃去れ。其徒。若。み。若。猿。身。變。い。子。か。ん。と。散。ら。ぬ。何。方。も。形。く  
 逃去。り。上。人。の。徒。を。これ。を。ん。く。愕。然。と。して。驚。え。は。上。人。對。ひ。彼。を  
 是。何。等。の。妖。物。也。と。何。の。害。を。な。す。と。不。審。問。へ。怪。む。道。理  
 かり。彼。を。攫。と。い。ふ。獸。も。猿。五。百。歳。を。経。ると。然。則。攫。ま。な。れ。り。さ。る。色  
 蒼。黒。く。社。人。の。く。行。善。人。を。攫。持。ま。す。名。取。貯。故。と。り。て。攫。と。謂。へ。と。  
 純。社。也。と。托。ね。故。不。ま。す。攫。父。と。名。づ。け。り。され。人。の。婦。女。を。攫。て。これ。と  
 子。を。生。む。と。い。ふ。近。此。地。の。傾。う。結。城。持。朝。の。自。心。女。妖。魔。を。攫。れ。  
 去。向。を。ま。る。と。と。今。の。老。攫。の。春。希。ひ。と。持。朝。の。世。は。父。に。勇。將  
 那。の。女。兒。の。み。よ。山。獵。せ。よ。妖。獸。を。惱。ま。され。此。所。す。法。を。乞。と。あ。ん  
 攫。を。や。これ。を。知。り。逃。れ。を。な。す。我。を。驚。ま。す。人。を。惱。ま。せ。世。は



持朝

旅亭  
の  
吊

持朝  
常阿上人  
の

結城

小栗卷之廿二

害の去田生いして助ることせん持朝より多法を教く彼畜生を除  
 志むべしと説示し多徒手ホとめて其妖悪の獸するは知り師の道徳を  
 感稱せる斯るふ旅宿の門外開く國守の出入りと保正を初奔を  
 常阿上人も徒手ホを俱く門外に立知り持朝上人をこれと做せし  
 常阿上人も慌忙これと相とゆる相とゆるの故めて貧道は旅宿へいせ  
 ろふ事わふは餘人とそはさるべきやとやこゆわ道徳の聖と振きまは  
 こといと畏し頼もふ事れはるる裡小伴や多とわねばしぎと入  
 中、賓主の堅定して后持朝より上人此地方へ杖と曳あつてこふ  
 必り傳へうと塵俗の勢も隔られ相見ると一日ここととらち近日  
 最愛めては女児と妖怪のつめを奪集るといふ此亦彼亦と索るは違  
 そのふおきそは猿たれ今日に旅宿もまゐりこと海度とも票く且を

女児と奪集し妖怪と降伏し女児も再會せん頼もむせんが為うと  
 速たれ常阿上人ち慈心命いして辞やまん姫人と奪集る身今日既かまの  
 旅宿もその相公の多道か力を借んと志るを妨んと彼畜生に皆皆欲  
 措ち人民を悩まそりて樂とを如邪の妖獸攘りて其少き彼を五百歳を  
 徑し猿もく獲とりて粗神通を得法れども佛力を借ふいうて討さるの  
 少き相公彼悪獸を退治し多る姫君を救ひ多のみゆわは并く人民  
 救ふべく彼も悪行民の嘆き少くくと相とる國守も在ません民の害を除  
 終る其任に貧乃まこ衆生を濟すとる勤る謹む國守の力をたどり  
 ちんせん疑ひもらびして貧道が言語を用ひると多めり持朝慈然として  
 貌を改め我がこと速は願當あると感謝とるも候あり上人の教いうと  
 疑ひちんせん女児と奪集し妖怪その神通とるまがじと岩舟山その

辨うくを詳説活き。上人さぞひはく人明日彼を討多うんとなん心  
 剛力活きりの十人うりを俱し相公と女性の姿打打りこも相公の  
 了を攫し知らしめはれをく。さて彼かりと女集ひる婦人多く侍人ま  
 達と子細と同多雨あれ彼着属少き術めい。月と変じて女とをを  
 るもとく人其時此鏡を照さば。いとう術をうととも淺よりうる処欺くこと  
 かうふは。既ゆして危急のりもあふ。此秘符を投下る身難自在さ。凡  
 容易退治しう入る疑ひは。貧道又此市居て祈念をば相公の力  
 かけをせん。と一面の宝鏡と。数十符をよひま。持朝うくまひわ  
 謝され。上人再びさうり。岩舟山へより近くと。いれ相公の  
 ころちの人と。彼妖獸とよく知り。その人彼が。ても此謀を知。平次  
 做好さるのみ。中々害火し出さん。これを奈何は。まかめ。持朝  
 我此のよ心は。つらがり。直うと。彼の僕子考あて。あれ。必定我即  
 知のせ。と。人と更。ま。と。是。を。怒。り。

第九編

九傑 遠慮良將を助く  
 三囊奇計 妖攫を伏せ

且説。前屏風の後より。二人の漢子。踊出。持朝の前。は。首。して。我。と。我。  
 俱。多。れ。と。持朝。驚。ひ。て。これ。を。え。る。其。骨。相。九。百。八。十。の。身。家。傑。の  
 士。と。て。多。れ。が。子。細。を。同。人。と。さ。り。附。上。人。二。人。を。吃。さ。し。ふ。と。再。在。ま。を。誰。と。う  
 思。ふ。當。國。の。ち。持。朝。と。あ。て。お。と。と。あ。よ。る。と。斯。の。を。れ。を。そ。と。云。懲。せ。が。二。之  
 の。漢。子。平。伏。し。て。小。臣。亦。必。守。に。由。緒。の。の。め。て。い。ふ。這。回。の。は。供。所。に  
 望。す。と。と。い。ふ。持。朝。涙。り。我。汝。亦。を。知。る。と。い。う。形。の。の。も。さ。ん。ん。を。後。者  
 小。み。と。各。武。謀。代。の。は。あ。て。を。る。縁。故。め。く。我。の。助。重。の。は。兄。と。後。者



ころふ其後宜とゆ後が夢く村の至るを待んとて郎黨とて東國に忍びしを  
 一色が動静を密にし牙の三列に忍び居るを法則を立寄る万長が  
 女兒懸懸せられ止と好く彼が許入贅せし不忠義も毒の照天丹  
 再合し遂に青墓を去り園をくらんと函山領ふあり村万長が女兒  
 の怨鬼と出られ不図悪瘡を直して立と社を殆死とせしと認るる  
 の告より車をおして熊野山の温泉に赴けぬと首より尾に至り手要と  
 摘ぐ物結りかそいふ小栗女を病平愈の後能く一色詮秀氏に  
 ぶき使を好さしより上とて因縁あり貧道小栗がくめお  
 心を用ひると不審ゆいられとて世の因縁ありいん小栗夫婦が  
 の上小栗あんとする竹の志を祝音大士もあはれい勅しあはれと語を  
 定てお朝之きお感し孝といひ忠と云揚ひも揃君はあはれおのさくらり  
 冥助ありのいりて幸意を遂きん我又謀をばして一色を致き後念の外  
 せとせられを期をささぎ志氣を遂げし人今熟く詮秀が光景をさるお  
 宿使を遣ふて君を惑し已持柄をとりて驕奢を擅し賢を妬むを  
 漫り己お消ありの進す。宿りありの退くし邪悪高お高と  
 ちつれが士民これを傍と法士の愁訴尋られと君詮秀が倭韓に惑んこれ  
 法士の望を果ししもの孫が鎌倉殿を怨と逆心を腰りの少くも我足を  
 患ひ屢法をもつとれ詮秀を憎と謗言を播く退けしとて  
 爾れとも我は一頁の失ふられ必と近日の鎌倉おあはれとてその村  
 家校と議好は一色を助重お討し小栗が家を再自さるといふへけは  
 上人をとめ二人のいり感謝してやと毎相公斯いみま仁心の在さる  
 我們碎骨とも岩舟山の妖怪とて姫君の恙なく奪集ひ還

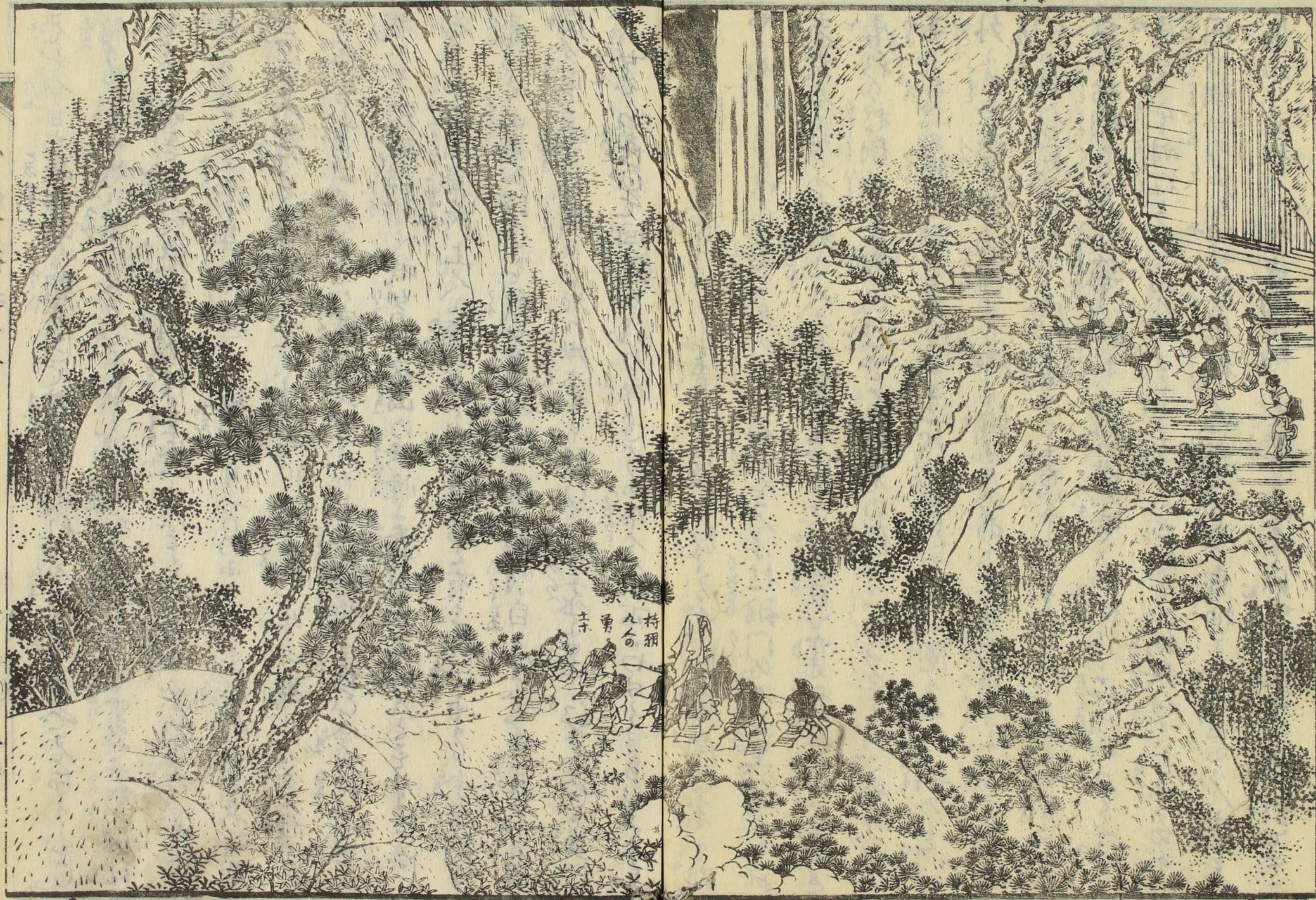


此嶋恩を報ひしやうん前あ相公自ら岩舟山に赴きなすらん  
 定めめんと我々小命も人折るく不ぞいのめり。と云ふまへ上人も俱々爾  
 り。いとと摩りつふ持朝を想ふ。我昨日岩舟山まで妖怪を騙  
 されだぬ云甲斐あり想ふ。再び彼山は行きぬと隠病をの  
 云ふと生涯の恥辱此うなしと云を交々回意々あり二人の老のこ  
 処いとく勇ま。其心は任ん。と弓矢とる身は名こそ惜れ  
 まの妖怪を編みれを恐れ再び彼所へ好まど。誹謗を受んは惜  
 々ま前小約束せぬ。我を分け山鬼を討たし。上こそ幸ひあはし  
 り。二人の持朝を精し。命い。皆死すらん。いさ。我が朋輩  
 をも以後して彼所へ赴くは準備あれ。いつ次の間うち對ひ池の庄司を  
 在り。加藤は岡本の足音を聞き。持朝の見糸あし。今夜直に

岩舟山に赴くと其時常阿上人持朝を止め曰。白き。も人跡  
 岩舟山に夜に乗じて行くと石を抱ひ。淵に臨み。薪を肩く。火を  
 炬し。明且を待。上り。今又我。今。持朝。前。は。女  
 性の姿。扮打。九人の。酒。樽。と。大。足。と。列。は。五。色。の。緒。は。麻。繩。を。隠。し。  
 これを。行。下。とい。は。し。の。行。は。秘。し。お。き。え。袖。の。裡。より。二。の。囊。を  
 取出。是。を。持。朝。に。さ。せ。云。山。上。に。至。り。ま。る。持。朝。の。囊。を。披。き。入。る。人  
 做。る。か。ら。紙。書。お。し。の。姫。人。は。遭。ひ。ま。ひ。て。后。才。二。の。囊。を。披。き。入。る。その  
 後の。囊。を。述。ぶ。せ。り。事。に。望。ま。ん。と。ま。る。及。び。才。三。の。囊。を。解。ひ。て。え  
 り。人。妖。鬼。を。討。た。の。術。を。記。し。付。し。り。此。三。囊。の。謀。を。疑。ひ。て。用。ひ。ま。る。  
 容易。妖。鬼。を。討。た。人。を。恙。も。付。ひ。還。り。ま。る。疑。念。を。起。し。ま。る。  
 急。危。う。ら。ん。と。父。の。ゆ。り。持。朝。講。へ。三。の。囊。を。受。納。め。感。謝。を。述。



持朝  
九雄と  
持て  
再び  
舟鼓山  
列



持朝  
九人の  
寺

山  
樂  
卷  
六  
十一







其光宗と驚くひ着く時こそよけれと追み寄る。大王今日も力を中し目を  
 りとけくおとくへが妖鬼呵くと笑ひ入り目よく縛めよ常の如くしてと真  
 ならぞと云はく仰さぬお即と女をさらけ持胡の携へ五色の指は麻縄を  
 手をりて手足と縛め石の床は堅く結付持朝は竹視されお急は洞乃  
 外も出で蒙衣をとりて相圖をなせ九人の們一般お取れお持胡の跡には  
 洞の裡へ走入り妖鬼これ取て縛るお急を牙を劫り縄を断んととれと解  
 とお急をたまお怒り叫ぶ声雷の如し此声を笑てお数百の猿猴集ひ  
 人々取て礫を打或は木片をりて討てかき九人の們持胡は對ひ此畜生  
 を我くおまうしお相るお妖鬼を討てと劫り群る猿猴お敵洞におあて  
 くら大木を引抜拂おありの刀を抜て切もありの勢ひおほうせ討てと一盃茶付  
 お數十正次討てお残る猿猴お恐るおは岩石樹木の弁らなくおあが

まおく逃失より其間お持胡の石床の四辺近付て総存をたて妖鬼が上  
 投擲お恐れ戦くこと人間の矢石お厭か如く暫耐お牙縮まて居るが  
 忽ち大喝一声とて牙を動かすとと入るり麻縄を交へる指断るお切れてお  
 散れお妖鬼お中へ牙を起し逃走しんととれお急を豫て教への宝鏡お懐より  
 取出しは挿は照しお思議や妖鬼戦ひと縮はく走りお急を此光宗  
 を着るよりも鏡を假り刀を抜き逃さばと斬てかきお山鬼おこれと偷眼側  
 おあり鉄杖といと持中りお打ちの對ひ合と鏡を急お恰お急のめくおて  
 待遇をてえへる処へ九人の們猿猴を退退今此お急を此戦ひを急  
 よりも四方よりおとり困我討てんと競ひか急がさしもお猛き妖怪も急  
 ともお勞れ果さめく急を庄司助長太刀次かきとて投棄て急を組お押  
 お急の傍輩討て急人と急は心お急を急を急とする急を急を急を大地お

常阿の  
法力  
持朝と

老  
撰

討  
玉

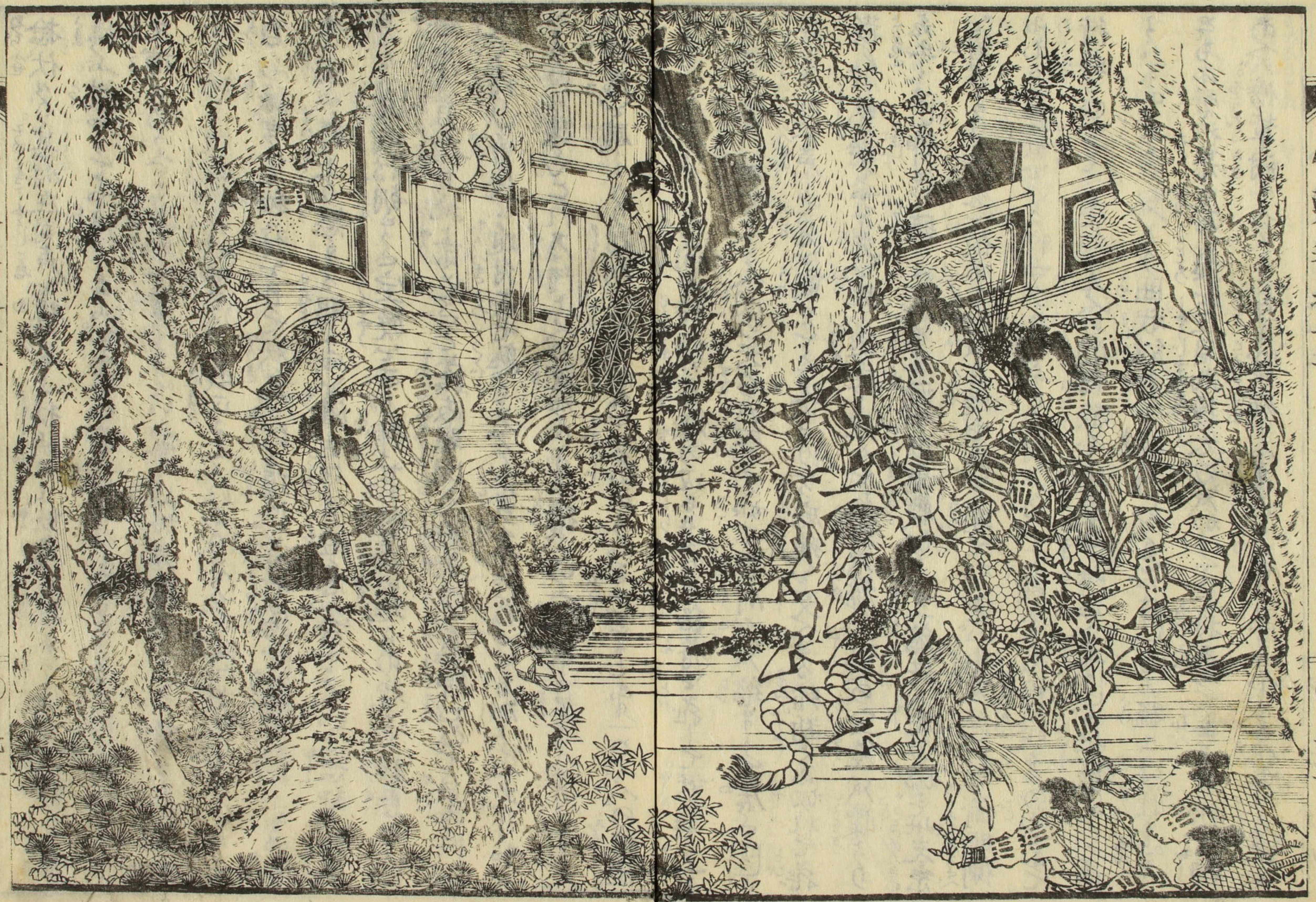
鏡と持

持朝と主

其の

九人の

至  
玉





拾伏らり其附庄司声を揚げやよ持朝公よ妖鬼と既おし捕はは籠りや牽  
後ふ此下もてや殊いもみおるもらひお任せんとありさるる持朝のいへも  
生捕りのると其功を賞しきといふや此妖鬼退治の工の鎌倉屋の命  
おもゆらに私の為此儘はして我にまことありさるる山を將てわらんより我  
自ら殊せんと秘符をりて妖鬼が頭を打落せしむべしその首  
宇宙お舞上り怒まる眼は血を灌きにより吐息火のごくいと恐却れ先  
景なり此附持朝まこと宝鏡をさし挿せし槿花の旭よあふごく猛悪なり  
妖鬼が首忽ち地上おとごとと落友眼閉く死せり鬼神亡ひて目おしと  
人くさび勇は近付きて熱くするや幾年経ぬるとも知らぬ大まや  
なる白猿とこれ阿上人の説知らるる櫻といふ妖鬼と足さめりとな  
の博識を感づらり持朝の海き能云を勢附のうち再ことと申す上人の法徳  
第一二五六九人の們が勇力よよわりと感謝とよほとびまなりかゝり持朝と  
白糸姫と尋子と不幸に恙なくありしうの父子互に飲びの對面を  
前再案内しける女らとも出でて門せし勞以謝し其身けらるる  
同へみる良家の婦女なり持朝おとを憐れ行ひとこの家へ  
おのり還らまじとありしうのみ好喜ひく恩を謝しなり此附に國加を郎  
進みおてさるるやうかた妖鬼死してもよく崇りなまをのこ早く焼く  
その邪を拂ひし人と誅せられ家爾ころもまりとせ妖鬼の屍は脊属  
ホが屍とを一所よあせ鬼の時よ飲食調度はを困りお積かさるる  
こまよ火がけ洞の中を焼はくし白糸姫をたぐ免女をら火に俱し  
九人のくくと俱し岩舟山を下り常阿上人の旅宿に至り妖鬼容身こ  
失く先景は詳小説話の恩を謝されば常阿上人もこまよをさふこと

八ノ巻 持朝の事

驚りし。斯く持朝と九人の人々が勞が漸く去りて主人小栗女重宿意を  
 遂げんとす。力をはりて今日恩報す。此事とや小栗夫婦は告げしと  
 云は。城中へ入らんとて太刀馬とてはこれを下程とす。九人の恩を  
 謝し祖の好意のほどを。中助さまぬふ告知し喜ばしめんとす。お  
 旅奈とす。常阿上人も我の諸國を托行の身なり。此地方へ入る居人の  
 宗祖の意思も差なれば。是より奥の方へ赴くと旅の宿りをもち。いづ  
 持朝とて火止しとす。これと止むと旅の費不亮とて。今浪人ゆゆ。一  
 不住の此方へ一鉢の舟上り。何と需んと。これ火止を受さず。持朝尚  
 さあぐお止しれと。上人今ううう。お回意。ごまなく杖を拂ひ。東次さ  
 立止む。九人の人も名残を惜め。とらん。畏く。其殿影を伏拜し。や  
 慈野へ赴くと。持朝は眼を乞西と。さして。旅發ぬ持朝の上人と。九人の

人の後影のうぬまてえ送り。姫をばめ女をら。復して城中かへ。を  
 北の方へ。あもは。かり。上下男女の家臣。白糸姫の恙なく。還るを。飲  
 奉。死。と。おの。甦。と。異。お。成。さ。め。れ。て。後。と。ま。り。ま。く。作。し  
 事。の。は。る。女。を。ら。死。が。その。家。く。お。送。り。還。り。け。し。且。が。国民。傳。へ。し。持。朝  
 が。仁。常。阿。上。人。の。徳。九。雄。の。勇。と。賞。し。ま。ら。ね。り。の。は。かり。け。し。

小栗外傳卷之十二畢

